

ブタの品種：中型種から大型種へ



公益社団法人 日本畜産学会
理事長 菊地 和弘

私は、大学浪人時代まで東北地方の中核都市で過ごしました。幼少期は（物心ついた頃は）、昭和40年代の初めで（東京オリンピックは記憶になく、アポロの月面着陸と大阪万博ははっきりと憶えています）、いま思うと終戦後25年弱で、「戦後」はまだまだ真っ只中、という時代だったと思います。そんな時代、都市周辺は稲作地帯ではありましたが、各農家にはまだまだ家畜・家禽、すなわち豚や鶏がいました。さすが農耕馬はおらずトラクターに置き換わっておりましたが、馬屋は残っていてそこに格納されていた感じです。当然ながら、農家で出荷できない野菜やくず米などが餌として与えられていました。市内では、家庭ごみの回収はされておらず、可燃ごみは各家庭で燃やすあるいは埋める、リサイクルができそうな資源ごみは「くず屋」に持ち込む、生ごみは「ぶたもの屋」がリヤカーで定期的に回収に来ました。「もの」はエサを意味する言葉で（方言でしょうか?）、「ぶたもの」とはそのものズバリ「豚の餌」を意味します。「ぶたもの屋」がただの回収業者なのか養豚農家なのかはわかりませんが、いずれにせよ今でいう典型的な残飯養豚です。自分の目で見ているのは回収するところまでで、その先のこと、たとえば養豚といってもどの程度の農家規模か、飼養品種は何か、餌は残飯のほか何を与えていたか、といったことは全くわかりませんでした。

ここに丹羽太左衛門先生の本がございます(1)。纏くと、「中型種から大型種へ」とのタイトルに続き、以下の通り記されております。

終戦「1945年」前わが国で飼われていた豚の品種は中ヨークシャー種(Y)（わが国では単にヨークシャー種と呼ぶ）とパークシャー種(B)およびその雑種であった。[略]昭和33~35年に大型種導入のきっかけがあって、昭和35~36年頃から欧州および米国からランドレース種(L)、大ヨークシャー種(W)、ハンプシャー種(H)、デュロック種(D)などが相次いで輸入・増殖され、これら大型種のシェアが急激に増大してわが国における豚の飼養品種はその様相を一変した。このことは、わが国の養豚史上大きな出来事であった。

なるほどです、状況が一致しそうです。

その後小学校に入ると、たしかに農家からは少なくとも豚はいなくなり（鶏はしばらく残っていました）、家庭ごみが回収されはじめ、「ぶたもの屋」は来なくなりました。町の肉屋では、肉は量り売りで経木と新聞紙に包まれて渡されていましたが、小学校高学年になりスーパーが登場すると（開店のニュースを聞きつけて、隣町まで徒党を組んで自転車で見に行った憶えがあります）、現在と同じくパックで売られるようになりました（違うのは、レジ袋はプラスチック製ではなく紙製でした）。鶏肉も同様で、父親が味が変わったと言ったのを憶えています。書かれている「養豚史上の出来事」の時代は国民生活の変貌期であり高度成長期への入り口でもあったようです。

さて、話を豚に戻します。肉としての流通量は限れていますが、パークシャー種は「かごしま黒豚」や「彩の国黒豚」などのブランドポークとして人気があり、現在でも一定数の飼養頭数が報告されています。いっぽう、中ヨークシャー種はほぼ飼育されていないといっても過言ではないと思います。私が知っている限り、ブランドポークとしては高座豚くらいでしょうか、千葉にも少しいるようです。典型的なミートタイプ（精肉用）の豚ですので、ぜひトンカツを食べてみたいと思っています。機会がありましたら、皆様もぜひご賞味ください。ちなみに、原産国のイギリスでは、小ヨークシャー種（英語表記はモンシロチョウと同じ）というものも存在していましたが現在はおりません。そのあたりの関係は「畜産用語辞典」をご覧ください。中ヨークシャーもパークシャーもその数は限定的で産業としては成り立たない状態で、英国養豚協会では遺伝資源として生体保存を行う取り組みを行っています(2)。ちなみに、中ヨークシャーは日本でもかつて家畜改良センターで生体保存されていました。手前味噌ですが、関連した論文(3)がございますので、お時間があればご覧ください。

文献

- (1) 丹羽太左衛門. 2011. 20世紀における日本の豚改良増殖の歩み. 財団法人畜産技術協会, 東京.
- (2) British Pig Association. Year of issue unknown. Conservation [homepage on the Internet]. British Pig Association, Cambridge, UK; [cited 07 July 2025]. Available from URL: <https://www.britishpigs.org.uk/conservation-alias/conservation>
- (3) Misumi K, Hirayama Y, Suzuki M, Nakai M, Kaneko H, Noguchi J, Kikuchi K. 2014. Production of Middle White piglets after transfer of embryos produced in vitro. Journal of Reproduction and Development 60, 246-249.

【引き続きのお願い】

学会 HP のバナーに「畜産用語辞典」があります。かつては冊子版として養賢堂から刊行されていたこの辞典が、現在は最新の内容を取り込みつつ、Wikipedia 形式で更新されています。畜産学の最新情報を簡単に調べられるだけでなく、どなたでも無料でご利用いただけるのが大きな特長です。これは公益法人としての学会が取り組む社会貢献活動の一環でもあります。他の検索サイトに行く前に、学会 HP のバナーをクリックしてご利用ください。



(日本畜産学会報 96 巻 3 号)